新・宝飾店紀行

# ハナジマ

（東京都江戸川区）

東京の下町江戸川区の松江というロケーションに、ある意味で日本を代表するに相応しい宝飾店ハナジマがある。自ら作り、自ら売る、極めて古典的な宝飾店の原風景が、思いもよらぬ“川向こう”の江戸・下町に、現在なお健在であること自体が驚きである。

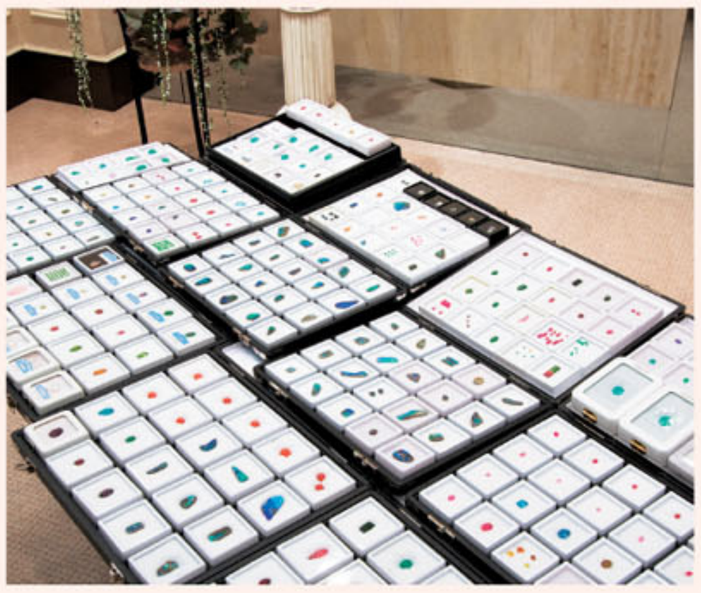
店主・花島素人（もとひと）氏は、この地で花島時計店を起業した“天才的販売職人”花島清治氏の２代目。先代の経営哲学、宝飾への見識、接客の極意を忠実に学び、それを頑なに守り、そこに新世紀の新しい息吹を取り込んで、いま古くて新しいジュエリーリテイラー・ハナジマの顔となっている。創業50周年の節目を跨（また）いだばかりのハナジマは、次なる50年の１年目をスタートした。

小松川橋（荒川）と今井橋（江戸川）を斜めにつなぐ、通称「今井街動」沿いでも、ハナジマは“街道一”の名店。

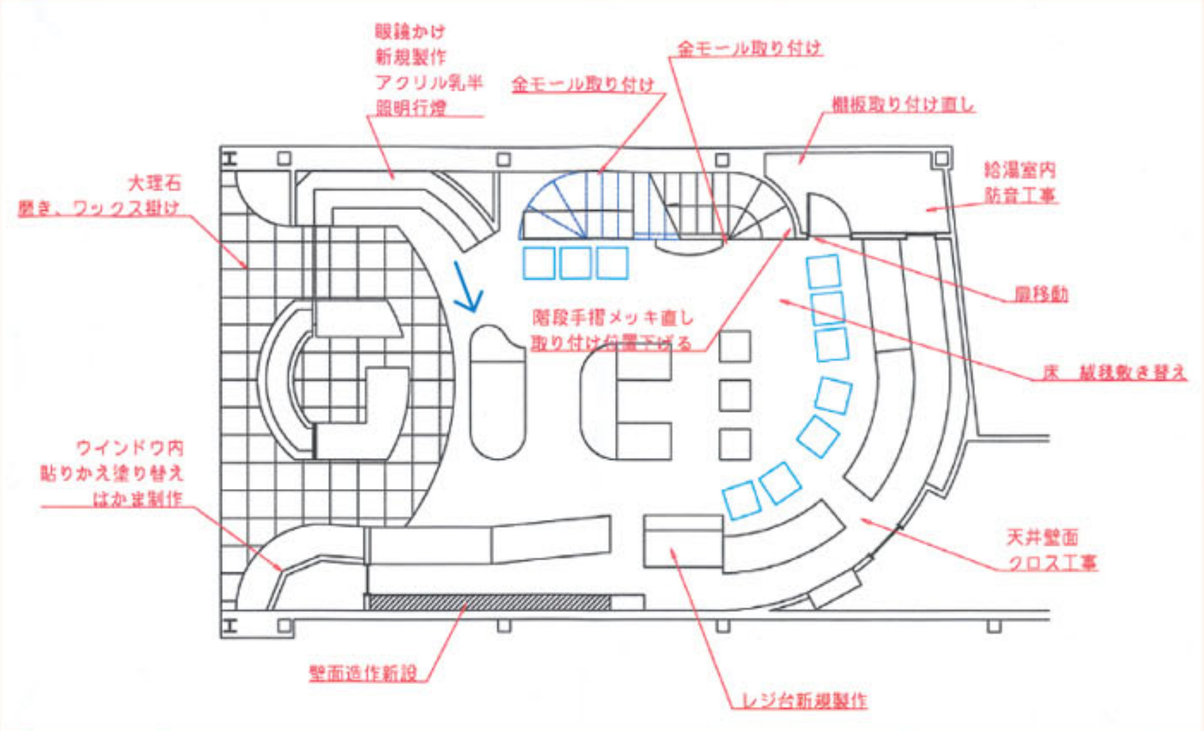
創業50周年を迎えたハナジマは、自ら作り、自ら売る、極めて古典的な宝飾店。しかし今となっては、その形態がとても新鮮である。

## 徹底した現金仕入れ、自前在庫、店頭主義そして無借金経営はハナジマの伝統

借り物がまったくない社内在庫量の多さもさることながら、最も重要な宝飾材料となるダイヤモンドや色石ルースの豊富な自社ストックを誇り、それを以ってして顧客からの特注品に常時臨戦態勢をとる。また、ウエディングリングに至るまですべて自家工場による手作り主義に徹し、更には店外催事を一切行わない徹底した店頭主義を貫くその姿勢は、“江戸川の星”どころか、催事に明け暮れる荒廃した今日の宝飾店の「希望の星」とさえ云えるだろう。



最も重要な宝飾材料となるダイヤモンドや色石のルースの豊富な自社ストック。




ハナジマの店舗１階のレイアウト図面
（２階は多目的ホール仕様）。

上記図面上矢印の方向から見た店内シーン。

あたたかみのある色調の中で、ジュエリーを吟味することができる。ゆったりとした、くつろぎの時間が流れる。

店内は、すべて自社商品。ウエディングリングに至るまで、すべて自家工場による手作り主義に徹している。

## ラザールキャプランと共に歩んだ ハナジマのダイヤモンドビジネス

無色透明の筈のダイヤモンドをラウンドブリリアントに理想形にカットすると、「ファイア」もしくは「ブライトネス」(GIA新ルール名)と称する7色の光となって、テーブル満面から放たれる。このことを立証し世界に先駆けて商品化したのが、伝説の名カッターのラザールキャプランである。ハナジマ創業者花島清治とラザールキャプラン(以後LK)の運命的出会いから、ハナジマの宝飾ビジネスは始まったと云っていい。LKダイヤモンドの対日取引事情は、様々な経緯を経て今日に至っているが、日本側トップクライアントの一社は常にこのハナジマだった。

ダイヤモンドの命はその「輝き」にあるが、その輝きの「美しさ」が極まるのを花島清治が見届けるには、ニューヨークでのLKとの出会い(1975年)まで待たねばならなかった。同じダイヤモンドを時を経て何度も眺め直し、その度に美しさが増し、その表情を微妙に変えるのは、実にLKダイヤモンドだけだったのだ。現在同社が秘蔵するLK Vintage Collectionなるルースコレクション(写真左)は、ハナジマの貴重な“社宝”のひとつに数えられる。

## 先代夫人の底力

ハナジマオリジナルとして、同社製品の柱となっている「加代子ジュエリー」の主こそ、他ならぬ花島加代子前社長夫人(現専務取締役)である。創業社長のあらゆる苦しみを公私に亘って共にし、ハナジマ50年の歴史を支えた一方の立役者だ。彼女自身が開拓した顧客の多くは現在も重要な客層をなし、今以って同社トップセールスであり続ける。本稿で紹介するトレンディーな作品例の大半は、彼女の変らぬ永遠の感性の賜物に違いない。

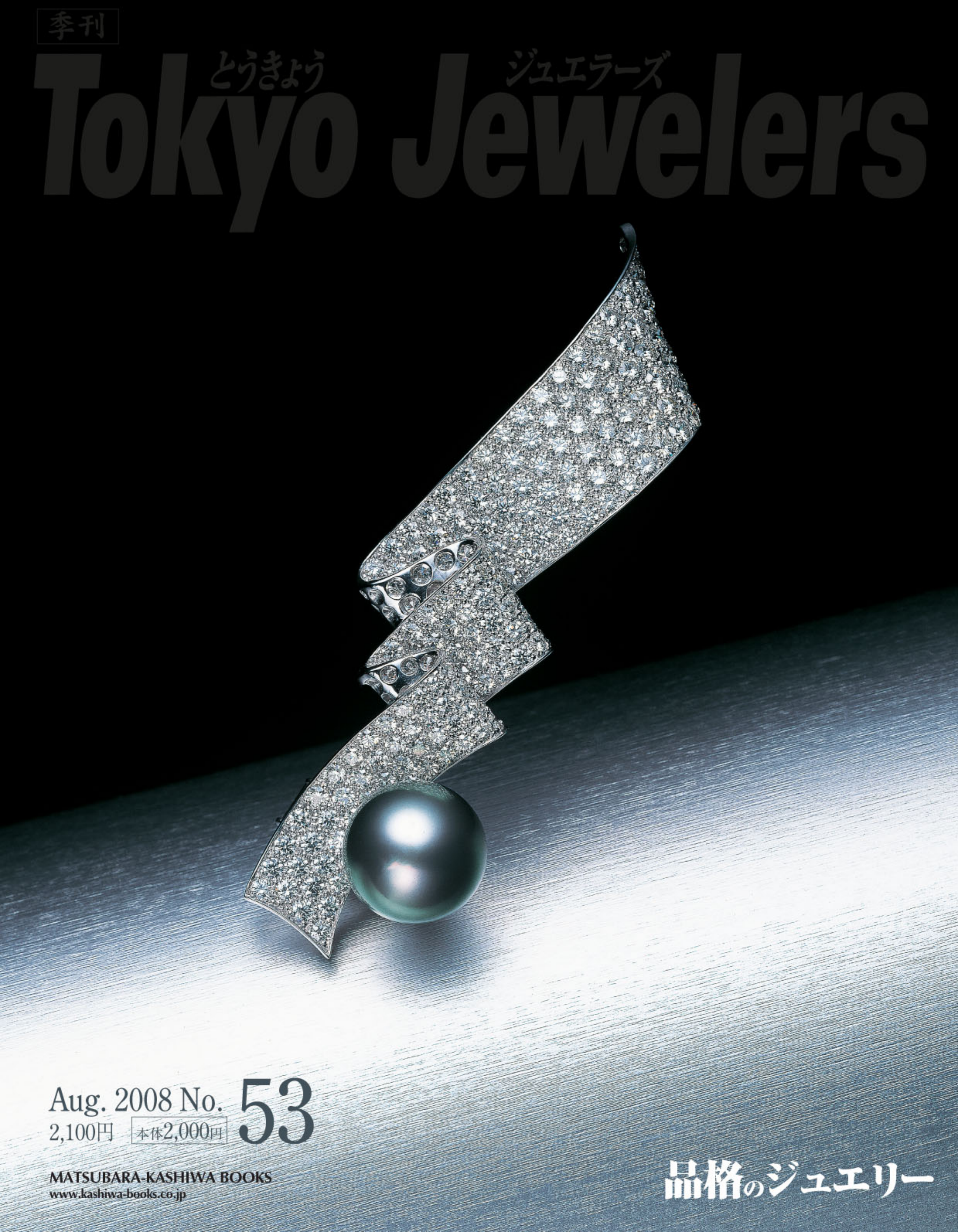
豊富な自社ルースで作られたジュエリー。バリエーションに溢れ、オーソドックスな中にも技巧を凝らした作品が多い。

「名曲をまず聞きなさい。すると駄物がよくわかるのです」(花島清治語録より)

株式会社ハナジマ
〒132-0025東京都江戸川区松江7-11-3
Tel. 03-3652-8740
営業時間10:00～20:00　火曜定休
www.hanajima.com

季刊

# とうきょう Tokyo ジュエラーズ Jewelers



Aug. 2008 No. 53
2,100円 本体2,000円

品格のジュエリー

MATSUBARA-KASHIWA BOOKS
www.kashiwa-books.co.jp